

日本ミステリ・シリーズ

1

Nippon Mystery Series 1

第六實驗室 佐野 洋

早川書房

著者略歴

本名 丸山一郎 昭和3年5月東京に生る 昭和28年東京大学心理学科卒
現住所 東京都大田区市之倉 227

主著書

「一本の鉛」(東都書房刊)

「秘密パーティー」(新潮社刊)

「完全試合」(光文社刊) 他多数あり

第一回配本

定価二九〇円

第六実験室

日本ミステリ・シリーズ

第一巻

昭和三十七年一月二〇日 再版印刷
昭和三十七年一月三十一日 再版発行

著者 佐野 洋

発行者 早川 清

印刷者 藤巻 哲士

発行所 早川書房

東京都千代田区神田多町二二二
電話 東京 〇三六・二六〇・三六四
〇三六・二六〇・三八四 (編集)

用紙・四国製紙KK／クロース・日本クロ
スKK／印刷・日東紙工KK／製本・堅省堂

第六實驗室

装帧 真鍋 博

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertong.com

序　　章

この研究所について、最初に報道したのは、東都新報の四月三日付朝刊である。この日の社会面トップは、ある農村で起きた「ショウチュウ殺人事件」の容疑者が逮捕されたという記事であったが、そのすぐ隣りに、『完全犯罪研究所』設立の動きが、掲載されていた。

民間に完全犯罪研究所

鳥羽氏の後援で年内に発足

戦後わが国に起きた難事件、未解決事件については、松本清張氏『日本の黒い霧』をはじめ、幾多の推理が試みられているが、これら迷宮事件と組織的に取組もうという『完全犯罪

研究所』の設立が、中央電鉄社長鳥羽辰彦氏らによって計画されている。

鳥羽氏は、南関東の私鉄、観光事業の約三分の一を支配する『鳥羽コンツェルン』の当主。同氏にこの話を持ちこんだのは、学生時代の親友で、『新犯罪学』などの著書もある現千代田女子大教授春部良介氏（翌）である。春部氏の説によると、警察庁、警視庁などの科学捜査は、主として、過去の犯罪事件で解決をみたものに根拠を置いているため、新しいタイプの犯罪に対しては無力な点が多く、これが迷宮事件発生の大きな理由となっているという。従って、この種新型犯罪に対しては、従来のように、捜査陣の側に立った研究よりも、犯罪を犯す側に立って、その心理、手口などを研究することが必要で、刑法学者、心理学者、作家など犯罪に関心を持つ有識者の協力で、新型犯罪発生の可能性を追及しようというのが、春部教授の構想である。

同教授が、先月末、若手の経済人の会合で講演を頼まれた際、この話をしたところ、鳥羽氏が共鳴、急速に具体化の動きをみせることになった。

鳥羽氏は、とりあえず、私財五千万円を基金としてきょ出、その利子で研究所の経費がまかなわれる予定だが、将来は民間同志からの寄付も仰いで、社団法人組織にすることも考えられている。

現在のところ、研究所の構成メンバーなどを、同教授が練っているが、おそくとも年内に

は発足して、捜査陣を側面から援けることになる。

鳥羽辰彦氏の話 実業家というのは、事業欲と同じくらい、社会へ貢献したいという欲望を持っている。美術館の建設とか、育英事業の推進というようなものも、みな、この欲望の現われだ。私は美術にも余り興味がないので、それに代るものとして、春部君の研究に微力を貸したいと思った次第だ。彼は学生時代から秀才として尊敬していた。大きな成果を上げてくれるだろう。

春部良介教授の話 私の年来の願いがかなうことになり、非常に嬉しい。他人に罪を着せるということも、或る意味では完全犯罪の一つなのだから、研究の進展によつては、無実の人々を救うことができるかもしれない。私としては、片手間のつもりでなく、一つのライフ・ワークとして取組みたい。

警視庁所沢刑事部長の話 その話は、まだ聞いていないが、悪いことではないと思う。正規の捜査活動に支障がない限り、協力はするだろう。

この記事は、『完全犯罪研究』という名前が、ミステリー・ブームの風潮を受けて、かなりの反響を呼んだ。二、三の週刊誌が、これをさらに詳細に報じた。

もちろん、この計画を、白い眼で見える人たちもいる。前記所沢刑事部長の談話にも見られるように、警察、検察畑の人たちは、素人に何ができると考えていたようであつたし、裁判官たち

も、裁判批判の雑音がさらに増えるだろうと、いい顔をしなかった。

また、皮肉な記事売り物にしている某週刊誌は、鳥羽辰彦が、かつて、一山師の弁舌に欺され、『発明援助協会』を作つて失敗した事実などを、一緒に報道していた。

だが、『ライフ・ワークにしたい』という春部の言葉は、彼の本心から出たものらしい。彼は千代田女子大教授の職を辞し、中央電鉄顧問の資格で、研究所の設立準備に奔走し始めた。

そして、四月末、東京駅八重州口の中央電鉄ビル地階に、『中央完全犯罪研究所』という看板がかけられた。もっとも、まだ正式に発足したのではなく、所員は春部と若い女助手の二人だけであった。

ところで、春部良介とは、どんな人物であるか？ これを示す資料として、つぎに、『週刊東都』にのった、対談記事を挙げよう。この対談記事は、漫画家の八田利也が、毎週話題の人物を訪ねて話を聞く企画で、『週刊東都』に、毎号連載されている。

『はったり対談』

完全犯罪にいとむ 春部良介氏

近ごろは、学者もいそがしくなった。昔は、ノートを一冊作っておけば、毎年同じことをしゃべっても、大学の先生として通ったらしいが、いまは、ラジオ、テレビに引っぱり出され、ベストセラーの一つも書かなければ、学生たちは名前さえも覚えてくれないという。そのせいか、象牙の塔を飛出して、俗界に興味を持つ先生方が、急にふえて来たようだが、さしずめ、この先生などは、その筆頭と言ってよいだろう。俗界の俗界たるゆえんは、悪人がはびこっている点にあるが、その悪人の側に立って、完全犯罪を研究しようというのだから、これほどの徹底ぶりはないわけだ。

(はったりや)

ミスター・グレイ

八田 なるほどグレイですな？

春部 何ですか？

八田 いや、わたしの姪が千代田女子大に行っているのですが、その子の言うことには……。

春部 ああ、『グレイの何とか』と言う？

八田 何だ、ご自分のあだ名をご存じなんですか？ 人が悪い。(笑声)

春部 そりゃあね。いやでも耳にはいつて来ますよ。廊下を歩いているでしょう？ 「ミスグレの授業を抜け出そう」なんて、そばの教室で話しているのが聞えます。(笑声)

八田 ミスグレ？

春部 ええ、ミスター・グレイの略ですよ。若いときは、これでも「グレイの君」なんて、しとやかなあだ名をつけられていたらしいんですが、それがいつの間にか、ミスター・グレイになり、さらにつまて、ミスグレになっちゃった。（笑声）

八田 なるほど、雷族、言葉まで制限速度を超えてしまうわけ。（笑声）ところで、そういうあだ名を奉られていながら、しかもなお、背広はグレイ一本というのは、人生観の現われですか？ 例えば犯罪者の心理はグレイだから……

春部 いやいや、どういたしまして。まあ、嫌いな色ではありませんが、実を言うと、あだ名ができてしまったからこそ、グレイで通しているとも言えるわけで……。

八田 それは？ 何だか、タマゴとニワトリみたいだけれど……。

春部 教師というものは、だいたいに於てそうでしょうけれど、とくに、女子大の教師ともなると、なるだけ、変ったことをしない方が無難なんですな。つまり、ミスグレがグレイを着ている間は、空気のようなもので、生徒たちも慣れっこになっていますが、そのミスグレが、派手なチェックでも着てごらん下さい。恐らく、日に何人もの生徒から、うるさく聞かれるでしょう。

八田 センセ、これどなたのお見立て？（笑声）

春部 そうそう、どんな心境の変化だ？ 結婚する気になったのか？

花壇から野原へ

八田 結婚の話が出たついでに一つ。そのお年まで独身を通していらっしゃるのは、何か理由が？

春部 理由なんてありませんが、大学を出て二、三年であの学校につとめ、美しいお嬢さんたちに接していると、結婚なんていつでもできるような気になってしまふのですな。

八田 よりどり見どり。そのうちには、もつといいのに当るかもしれないし。(笑声)

春部 それほどの悪人でもないですが、つい何となく……。

八田 では、こんどはそういう美しい花壇を飛び出し、むくつけき犯罪者と取組むのですから、いよいよ独身にもおさらばですか？(笑声)

春部 さあ、どうですか？ それに、犯罪者だからと言って、むくつけきとは限りませんよ。

「犯罪のかげに女あり」というわけで。ことに、完全犯罪というのは、犯罪のかげの方に重点が移るから、女性専門になってしまうかもしれない。

八田 なるほど、では、やはりお花畑には変りありませんか？

春部 まあ、野生の花でしょう。花も美しいが、とげもある。案外、今度はとげばかりが眼について、結婚する勇気がなくなってしまうかしら？

八田 女って、そんなに恐しい動物ですか？

春部 恐しくありませんか？ 女のこと、八田さんの方が詳しいでしょうから……。

八田 いやいや、こっちはとげが眼にはいらぬ方で……。

完全なる浮気

八田 話が、どうも最初から脱線してしまいましたが……。そろそろ本題にはいりましょう。完全犯罪の方です。完全犯罪というのはあるのですか？

春部 そりゃあ、あると思いますよ。近い話が、女房に全然感づかれずに浮気している男なんかもいるでしょう？ こんなのも、完全犯罪の一種です。

八田 へえ、いますか？ そんなのが……。完全犯罪の話よりも、そっちの秘訣の方が知りたいくらいです。

春部 よく、婦人雑誌などで、「夫の浮気の見破り方」なんて記事がありますね。そういうのを読んでみると、非常に面白いですよ。夫が急に優しくなった場合とか、身だしなみに気にしだしたときにはどうか、まあ、それはそれで、一面の真理には違いないのですが、全部の浮気が、そんなステロタイプのものとは限らないわけですよ。だから、そういう記事は、ステロタイプの浮気を発見するには役立つだろうけど、そうでないものには、至って無力です。これ

と同じことが、実際の犯罪にも言えると思うのですな。

八田 婦人雑誌型捜査方法ではだめだというわけですか？

春部 そうです。変な例ばかりで恐縮ですが、よくどろぼうにはいる前に、その家の前で糞便をすると言われていますね。これはまあ事実なので、現実にも、糞便の分析から血液型を割り出し、犯人逮捕の端緒にした例なんかもあります。しかし、これをちょっとひねくってみましょう。何らかの方法で他人の糞を集め、それをどろぼうにはいる家の前に置いておく。捜査陣は、重大な手がかりだとばかりに、早速分析をはじめます。真実とは違った結果がでてしましますよ。

八田 なるほどね。それが、春部さんのおっしゃる、「犯人の側からの見方」というやつですね。

春部 まあ、今の例などは、極めて初歩的なものなのですが、現行刑訴法の証拠中心主義、及びそれに基いた科学捜査というのは、それによく精通した人間には、裏をかかれることもあるのではないのでしょうか。捜査一課長とか、鑑識課長といった人たちが、十分に考え抜いて殺人を犯せば、現在では完全犯罪になってしまうと思いますよ。

研究の目的

八田 ところで、そういう完全犯罪の方法を研究なさる目的は？

推理作家が頭の中で考えるの

とは、全然違うと思うのですが。

春部 それについては、いろいろな考え方があってと思います。純粹に犯罪学という学問的立場から、研究自体が目的であると考えられることもできるわけですね。しかし、私は犯罪学というものは、道楽学問ではない。従って、その成果を実際に役立ててこそ、初めて意義があるのだという考え方をとりたいと思います。さて、それでは、完全犯罪の方法を研究して、それがどのように役立つかという問題があるわけですが、これは推理小説の殺人トリックと実際の犯罪との関係と同じようなものではないでしょうか？

八田 推理小説のトリックというと、密室とか、一人二役とか？

春部 そうです。ご承知のように、密室トリックの中には、実際には不可能だと思われるものも、ずいぶんありますが、反面、実現可能なものもあるわけです。事実、数年前、有名な密室トリックをそのまま使ったような犯罪があったのですが、捜査官の中に、小説を読んだことがある者がいましたね。結局、そのトリックを見破ってしまったのですよ。この場合、その刑事が知らなかったら、事件は自殺として片付けられてしまったでしょう。これと同じように、完全犯罪についても、そのいろいろなパターンを研究し、分類しておけば、同様な事件が実際に起きたときに、役立たせることができるだろう。これが、研究所の一つの目的でしょうね。さらに、そうやって完全犯罪のパターンを研究する過程に於て、過去の未解決事件を、あらゆる

方面から、自由に検討しますから、その過程で、今まで気づかれなかった解決への糸口が発見されるかもしれない。まあ、そういった期待も持ってかまわないと思いますね。

八田 すると、将来には完全犯罪つまり未解決事件というものは、なくなってしまうわけですか？

春部 いや、そうは言えないでしょう。人間の頭というのは、大したものですね。誰かが、また、新しい方法を考えるでしょうから……。

発表の時期ではない

八田 ところで、そういう結構な計画に対して、警察当局は必ずしも、好意を持っていないようですね。新聞に記事がでたときも、刑事部長が妙によそしい談話を発表したりして……。

春部 まあ仕方がないでしょう。警察組織というのは、やはり官僚機構に違いなわけですし、そして官僚機構の内部にいるものは、どうしても排他的になる。これは、何も日本だけに限った現象ではなく、世界中どこに行っても、官僚の縄張り争いのようなものはあるのですね。所沢刑事部長は、私は二、三度会ったことはありますが、個人的には非常に親しみ易い、いい方なのですが、肩書づきで物を言うときには、やはり、ああ言わざるを得ないでしょう……。

八田 そうかもしれませんね。とすると、ちょっと心配になってきました。

春部 何ですか？

八田 いま春部さんは、非常に卒直にいろいろのことをしゃべって下さっている。花にとげのあることまでもね。(笑声)ところが、聞くところによると、こんど、中央電鉄顧問という肩書きがついてしまった。中央電鉄は民間会社ではあるけれど、あれだけの大会社になると、官僚機構と同じような性質を持つてくるのではないか？ まあ、これが杞憂であればいいのですが……。例えば、具体的にどうこう言えませんが、何か会社の利益と反するようなことを……。

春部 いや、その点のご心配なく。社長の鳥羽君にも、そこは釘を打つてあるのです。彼とは、高等学校の寮で同室だったこともありますし、大学時代に一緒に悪いことをした仲間です。だから、わがままだけは通さしてもらうつもりですよ。こんどの話は、私から持ちこみ、承知してもらったのですが、自由にやらしてくれることは、絶対的な条件だったのです。

八田 それならいいのですが、どうも、生来苦勞性なものですから……。ところで、研究所のメンバーは、すでに腹案があるのでしょう？

春部 もちろん、一応の腹案はあります。しかし、いまはまだ……。

八田 発表の時期ではない？ ほら、ほら、何だか、国会答弁に似て来た。(笑声)

春部 いや、これはどうも。(笑声)ただ、私としては、皆さんにお願いする前に、一、二、三、実験しておく必要があると考えているので、まだ、どなたにもご相談していませんですよ。だから、ここで発表してしまって、あとで、「おれは聞いていなかったぞ」というようなことに